

## 平成 22 年度学位授与式における学長式辞(平成 22 年 9 月 17 日)

本日ここに集われた学部卒業生および大学院修了生の皆さん、卒業ならびに修了、まことにおめでとうございます。また、今日まで学業に励む皆さんを支えてこられたご家族の方々に対しましても、そのご労苦に敬意を表するとともに、心からお祝いを申し上げたいと存じます。

本日、埼玉大学の学部を卒業し、学士の学位を得た人は23名、大学院課程を修了して、修士の学位を得た人は6名、博士の学位を得た人は25名です。このなかには学部の早期卒業生が3名含まれています。また祖国を離れて埼玉大学で研究に励んできた留学生が、修士・博士合わせて18名含まれております。さらには、学位論文を本学大学院に提出して論文審査に合格し、博士の学位を得られた人も別に3名います。皆さんが今日という日を迎えることができたのは、皆さん自身の弛まぬ努力と自己研鑽の賜であります。私は、このことに敬意を表すると共に、いずれの方々もこれまでの研鑽の成果を存分に活かし、夢と希望と誇りを持って、新しい生活を始めていただきたいと祈って止みません。

さて、本日は皆さんの新しい旅立ちの記念すべき日でありますので、二つの事柄について述べ、皆さんを送り出す言葉にしたいと思えます。一つは、今の時代状況についてであります。こう言いますと、皆さんは、直近の三つの話題が頭に浮かんでくることでしょう。第一の話題は深刻な不況です。在学中に就職活動で苦労した経験のある人は、一昨年秋のリーマンショックに端を発する金融危機、経済危機が及ぼした影響の大きさを肌身で感じられたと思えます。しかも、日本は不況にこのところの円高が加わり、そこからの脱出がますます見通しにくくなっています。

日本経済は暗い面ばかりが目立ちますが、しかし、世の中は暗いばかりではありません。第二の話題は、8月6日に行われた広島市主催の平和記念式典に、潘基文（パン・ギムン）国連事務総長が国連のトップとして初参加すると共に、米国のルース駐日大使、フランスと英国の臨時大使ら、核保有大国の大使が歴史上初めて参加したことです。ご承知のように、この動きは、昨年4月5日、オバマ大統領がプラハで行った演説が契機になっています。核兵器廃絶に向かって、世界がようやく動き出したのです。

一昨年11月、バラク・オバマが we can change. と言ってアメリカ合衆国史上最初の黒人大統領に選ばれた意義は、まことに大きいと言わなければなりません。オバマ大統領は就任早々「グリーン・ニューディール」戦略も打ち出しているのです。

何故、いまこの時点で、このような変化が出てきたのでしょうか。それは、産業革命以来蓄積されてきた環境破壊や核開発を放置するならば、地球と人類社会が破滅するということが誰の目にも明らかになってきたからであります。世界中に格差を広げるグローバル経済の仕組み、世界を経済危機に陥らせたカジノ資本主義も同罪です。日本社会で起こっているさまざまな問題も、少なからずこれらと関わっています。いま、持続可能な21世紀社会に向けて、経済、社会、政治の在り方を再デザインしなければならない、既存のシス

テムと規範を見直さなければならない段階に来ているのです。

さて、第三の話題は、つい先日、民主党の代表選で菅首相の続投が決まったことです。私は、この代表選の評価を行おうとするものではありません。ちょうど一年前の総選挙で起こった歴史的な政権交代以降、国際的な動向を踏まえて日本を革新しようとする試みとして、子供手当や高等学校の無償化などが実施に移されたこと、そして今、「新成長戦略」が「グリーンイノベーション」と「ライフイノベーション」を柱の位置に置いて追求されようとしていること、他方、沖縄の基地問題の解決が宙ぶらりん状態に放置されていること、こうした日本の在り方全体を巡る政治の動きがこれから本格的に始まるということに、私は注目していますが、皆さんはどうでしょうか。

以上、私が皆さんに言いたいことは、世界は、そして日本は、いま大きな時代転換期に入っていることを自覚していただきたいということなのです。もちろん、時代転換、社会転換は一挙に進むわけではなく、長いジグザグの過程を辿ることでしょう。それだけに厳しい時代になるということも覚悟しておく必要があるでしょう。

そこで、もう一つの事柄に移ります。それは、そういう厳しい時代転換期をしっかりと生き抜いていくために、皆さんに心がけていただきたいことについてです。皆さんは、今日を境に埼玉大学における勉学と研究に一区切りをつけ、さまざまな社会の現場に出て行かれます。企業に職を得て仕事につく予定の人、埼玉大学あるいは他の大学の大学院に進学してさらに研究を続ける予定の人、大学あるいは他の研究機関に籍をおいて自立した研究者として働くことになる人、祖国に帰って国のために働くという人等、さまざまでしょう。しかし、皆さんがどういう道に進むことになっても、埼玉大学で身につけた知識と知恵が武器になるはずですよ。

この時代転換期にあっては、皆さんが、今選ぼうとしている進路を変えずに目標にたどり着けるということは、よほどの幸運に恵まれない限り難しいと考えておかねばなりません。今ある組織が永久不変に存在すると想定することは非現実的です。皆さんは、これから何度も軌道修正を余儀なくされることでしょう。そのときに武器になるのは、やはり知識と知恵です。皆さんには、今後も、一層「知識」を広め、徹底して「知恵」に磨きをかけることを心がけていただきたいと思います。

と同時に、皆さんには、厳しい時代転換期に相応しい思考行動様式を求めたいと考えます。皆さんには、転換の動きに翻弄されるのではなく、その「知」を活かして、転換に積極的に関わってほしいと思うのです。もちろん、組織を変える、仕事を変える、社会を変える、さらには自分を変えるという営みは、一人でなし得るものではありません。他者に「共感」し、「共感」され、理解し、理解されなければ、独りよがりな人間として、社会の片隅に放置されるでしょう。

こうした思考行動様式は、転換の流れに便乗して自分だけが得をするという、利己的な思考行動様式とは無縁のものです。少し前、市場原理主義の思想に立脚した小泉構造改革が吹き荒れた時、「利己的人間」神話が広がりましたが、この改革が結果として強者に与

し、弱者を虐げることを見せつけ、社会に大きなひずみを生じさせたことは私たちの記憶に新しいことです。その反省の上に、いま社会の維持という視点からの人間像の再構築が求められているのです。

ここでは皆さんもよく知っている二人の学者を取り上げましょう。一人は、進化論で有名なダーウィンです。彼は1871年に出した『人間の由来』で、人間の道德性の問題を取り上げ、その起源となっている「苦境する他者への共感や他者を助けたいという奉仕の心」が自然淘汰と遺伝によって継承された「人間の社会的本能」であることを示しました。

もう一人、現代リベラルの最大の思想家、ロールズに登場してもらいましょう。彼はダーウィンの本から百年後の1971年に出版した『正義論』のなかで、ダーウィンが「共感」や「奉仕の心」を人間の本能と捉えたのとは異なり、人間を自由で、自らの目的を自分自身で選択できる人格と捉え、「人間の利己的傾向」を指摘します。しかし、加えて、そういう利己的個人によって構成される社会を放置しては、「社会」が壊れると述べ、そこから「社会的協力」の意義を、ロールズは主張しているのです。

二人が基本に据える人間像はまったく異なりますが、私たちが社会の中で生きていくうえで、「共感」や「奉仕の心」、「社会的協力」が不可欠になっていると纏めていいでしょう。このことは、今日の時代転換期にあって、いっそう強く求められていると言わなければなりません。

私は、この時代転換期にあって、皆さん全てが、他者に「共感」し、「共感」され、そして社会から信頼を寄せられる職業人・市民になっていただきたいと、願っています。

以上、私は二つの事柄について述べました。

本日学位を取得された皆さん一人ひとりの将来が幸運と幸福に恵まれますように。そして、それぞれに悔いのない人生を送られることを祈念して、私の式辞といたします。

平成 22 年 9 月 17 日

埼玉大学長 上井喜彦